



### Profile—今井むつみ

1989年、慶應義塾大学社会学研究科後期博士課程修了。1987年～1993年までアメリカに留学し、ノースウェスタン大学にてPh.D.取得。2006年より現職。専門は認知発達心理学。著書は『ことばの発達の謎を解く』（筑摩書房）、『ことばと思考』（岩波書店）、『人が学ぶということ』（共著、北樹出版）など。

1987年夏、私は慶応大学社会学研究科博士課程に在籍中だったが、ふとしたことからロータリー奨学金を期限つきでいただけることになった。そしてメタ認知の研究で著名なアン・ブラウン先生のもとで勉強したくて、イリノイ大学への留学を希望した。

しかし思いがけぬ偶然から、留学直前にイリノイ大学のアンダーソン先生と日本で出会うことができた。アンダーソン先生は奥様のジャナ・メイソン先生とともに、日本の小学校での読み、読書教育の研究をするために数週間東京に滞在されていた。アンダーソン教授ご夫妻をホストされたのは東洋先生で、私が秋からイリノイ大学に行くことをご存じだった東先生が、ご夫妻が学校を訪問するときの通訳をするようにお声をかけてくださったのである。

アンダーソン先生の研究論文はいくつも読んでいたが、雲の上の偉い先生で、身近に接することができたのは当時の私には夢のようだった。実際に会ってみるとほ

## リチャード・アンダーソン先生の思い出

慶應義塾大学環境情報学部 教授

今井むつみ (いまい むつみ)

んとうに気さくで、親切な方だった。渡航したときにはご自宅にしばらく滞在させてくださり、アパートから中古車探しまであれこれ世話してくださった。

もともと指導をお願いしていたブラウン先生はご病気がちでほとんど大学に姿を現すことがなく、何回かアポイントメントを取ったが毎回キャンセルされて結局一度も会うことができなかった。アンダーソン先生は事情を知って、ご自分の研究室に私を引き取ってくださった。間もなくブラウン先生はカリフォルニア大学に移ってしまわれたので、アンダーソン先生がいなければ私は指導者がいなくなり、途方に暮れてしまっていたことと思う。

ロータリー奨学金の期間は1年間だけだったが、アンダーソン先生はアメリカに来たからには博士号を取るまで留まるよう勧めてください、先生の研究資金でリサーチアシスタントにしてください。与えられた仕事はアメリカの小学生の「読み」の授業中のビデオから子どもの注意の変遷をコーディングして、テキストへの注意がどんな要因でそれしてしまうか、それがパフォーマンスにどう影響するかを定量的に表す統計分析だった。当時、分散分析もおぼつかなかった私がいきなりイベントヒストリー分析という超難度の分析を担当することになり、メインフレームのコンピュータを用いてBMDPという統計ソフトで行ったのだが、1回のランが30分、課金は1回500ドルくらいした。つ

まりモデルの指定を間違えると500ドルがパーになったのだ。

このような分析が統計初心者の私にできたのはイリノイ大学の充実した研究サポートシステムのおかげである。学生や教授陣の研究のための統計コンサルティングを無料で提供してくれる場所があり、そこに行くで統計学部のドクターやポスドクの方たちが生データから一緒に見てくれて、統計ソフトのプログラムを書く手伝いまでしてくれた。アンダーソン先生も、1回のランが500ドルもする分析を私のようなものに任せるなど、正気の沙汰ではないと思ったが、失敗してもにっこり笑って「次は大丈夫」とひたすら励ましてくださり、*Journal of Educational Psychology*に出版した論文の筆頭著者にしてください。

私は数学が苦手で統計のセンスもないのだが、新しい分析方法へのチャレンジに今まったく抵抗がないのはこのときの経験があるからこそである。このように素晴らしい環境と素晴らしい指導者に恵まれたイリノイ大学の3年間だったが、「読み」の研究よりも言語発達の研究がしたかった。ちょうどその時イリノイ大学からノースウェスタン大学に転籍されることになったгентナー先生に研究の相談をしに行ったところ、自分と一緒にノースウェスタン大学に来ないかと誘われ、身を裂かれる思いだったが、大学の移籍を決断した。このときの経緯とノースウェスタンでの経験はまた別の機会にお話ししたいと思う。